第６号　昭和56年9月30日

文化財やまと

大和村文化財保護協会発行

七鈴五獣鏡

破壊と創造（二）

会長　野田直治

汝（なれ）や知る都は野べの夕ひばり
あがるを見ても落つる涙は

応仁の乱で焼野が原となった京都のさくばくとした光景を詠んだものとして、一般によく知られた歌である。「応仁記」を見ると、戦争のために、古来有名な寺院や仏像が惜しげもなく焼かれていくのを見て「仏法・王法ともに破滅し、諸宗みなことごとく絶えはてぬる」を悲しんで、飯尾彦六左ェ門尉という一武人が詠んだと書いてある。

一見平凡な歌に見えるけれども、よく味わってみると、何ともいえない哀愁がただよっていて、時代に生きた人間の悲しみが伝わってくるような気がする。

篠脇城が、斎藤妙椿の攻撃を受けて落城したのも、この時代のことで、京都での大乱の余波であった。応仁二年（一四六八）九月四日、京都では御室（おむろ）の仁和寺が兵火にかかって焼けた。これは光孝天皇の勅願寺として、上下の尊信を集めた古寺であったが、一場の煙と化した。また七日には嵯峨の天竜寺が焼けた。これは足利尊氏・直義兄弟が、後醍醐天皇の菩提を弔うため、また自分たちの罪亡ぼしのために建てたもので、足利将軍家の信仰が厚かったが、跡形もなく焼亡した。

この二寺院が炎上した中日（なかび）、つまり九月六日に斎藤妙椿の率いる大軍のために、東氏の居城篠脇城が攻め落とされた。歌道の家として誇り高い東氏の本拠は、一時的ではあったが、敵軍の支配下に屈伏したのである。その時の攻防戦がどんなに激しかったか、記録もないまま、長い間のなぞであった。ところが、昨年来の発掘調査によって、東氏居館跡とその破壊の跡が次第に解明されつつあって、われわれは、改めて戦争の無情冷酷さを痛感するのである。

当時城主は病弱な氏数で、優勢な敵軍の前に施すすべもなく、あえなく落城した。氏数は城と運命を共にする決心であったが、家臣たちに諫（いさ）められて、不本意ながら一時気良に逃れたという。

そのとき、氏数の弟で歌人として有名な東常縁は、将軍義政の命によって関東に出陣中で、本領が敵の手に落ちたとは夢にも知らなかった。折しも彼は陣中へ僧を招いて、亡父益之のため、追善供養をしていたが、そこへ落城の知らせが入った。常縁の驚きと悲しみが、どんなに大きく深かったか、「鎌倉大草紙」には彼の胸中をだいたい次のように記している。

「ここ（郡上）は、常縁の先祖中務入道素運（なかつかさ　そうん）が承久合戦の戦功で拝領した旧治である。代々（よよ）一〇世に及ぶまで、ついぞ他人の支配を受けたことはなかったのに、私の代になって、思いがけもなく関東に下向して、その留守中にこのような事になってしまったとは、無念とも何とも言いようがない」と残念がって

あるが内にかかる世をしも見たりけり人の昔のなほも恋しき

と、生きて見る落城の悲しみを一首の歌に詠んだ。

浜式部少輔春利は、京都から常縁に随行してきて、同じく陣中で苦労を分かち合ってきたが、この歌を聞いてひどく心を打たれ、京都へ便りがあったとき、兄の浜豊後守康慶の所へ書いて送った。康慶もこの歌に感動して、和歌の仲間に見せてもてはやしたので、たちまち都の評判になった。

やがて、斎藤妙椿もこのことを伝え聞いて、康慶に向かい、「常縁は昔から和歌の友人である。いま関東に出陣中に、本領がこんな事になったと聞いて、さぞ残念に思うだろう。わたしも長年和歌を好んできた身として、無情なことはできない。もし常縁が和歌を詠んで送ってくれるなら、領地はもと通りお返ししよう」といった。

妙椿のこの好意的な提案は、浜兄弟の仲介で常縁に伝えられ、有名な一〇首歌による城の返還が実現するのである。世人は、これを「和歌の徳」として称讃した。

しかし、一〇首歌の「徳」もさることながら、その前に、常縁が亡父追善の席で詠んだ「あるが内に」の一首の方に注目したい。これが浜兄弟をはじめ、人々の心を動かし、さらに妙椿の心をも和らげたと思うからである。一〇首歌は、むしろその総仕上げだったと思われる。

円空仏随想

河合俊治

七月三十一日、大和村文化財保護協会で萩原町禅昌寺の「南飛騨円空仏展」を参観する機会を得た。

私は、幸いにして過去何回かの円空仏展を参観し、幾百体かの円空仏に接する機会を得たので、この際、禅昌寺展のみにとらわれず円空についての随想をのべてみたいと思う。

円空は寛永九年（一六三二年）美濃国（竹ケ鼻といわれる）（群馬県富岡市貫前神社旧蔵大般若経奥書による）に生まれたが、以来三十二才即ち寛文三年（一六六三年）郡上郡美並村根村神明神社の天照皇大神像造顕まで全くその消息はわかっていない。言いかえれば、円空は郡上郡においてその生涯における造仏活動の第一歩を印し、以来六十三才（元禄八年）の夏関市弥勒寺において入定するまで三十年余たゞひたすらに自分の生涯の仕事として全国遊行のかたわら造仏の営みを続けてきたのである。

今日でこそ円空は上人とも尊ばれ大芸術家ともたゝえられているが、当時は何処にもあった遊行僧の一人として或いは天台の修験者の一人として極めて地道な行脚の道を歩いていたに違いないと思うのである。特に円空の造仏活動を通じての足跡をたどってみると、その足跡は中国・四国・九州を除く全国に及んでいるが、或る時は一宿一飯？の恩義に報いてその家の仏像を刻み、或る時は地域集落の庶民から乞われるまゝに雨乞いのみ仏を造り、又或る時は氏子達の切なる願いからか神社や御堂の造仏にのみを奮っている。

而もこれらの造仏活動はものみな庶民達の願いのものであり、喜捨も乞わず名も刻まず、たゞ造仏による功徳を信じての活動であったと思われるのである。かくしてその造仏、拾万余体（元禄三年吉城郡上宝村にて十一面観音像など三体を造顕しその内の背面に十万体造顕達成と自書している。年五十九才）まさに超人的な大事業であるといわなければならない。私はこのあたりに人間円空の人柄を偲ぶことが出来るような気がするのである。

背に経巻や数丁ののみを背負い長い旅にほころびた法衣をまとい黙々と修験の道にいそしみ、村から村への行脚を続ける円空の姿が彷彿として浮かんでくると共に、人間円空に対するいゝ知れぬ感動を覚えるのである。まさに庶民と共に生きぬいた遊行聖（ゆぎょうひじり）円空の旅姿である。

円空の仏像には極めて大きな特徴がある。通称「なたばつり」といわれるその彫刻法もさることながら、その第一の特徴は微笑仏といわれるその顔にあると思う。満面に笑みを浮かべ、すがすがしいくらいに透徹した顔、何者をも超越して悟り切った美しい顔、何とはなしに我々に語りかけているその顔、それにはみじんの曇りすらない美しい顔である。一面円空の守護神を見る時、そこには又全く異なった顔が生まれている。らんらんとして相手を睨み怒髪天を突くが如き相をなしその怒りは降魔の形相そのものともいうべきである。仏像彫刻が始められてより凡そ二千年余、かつてこのような仏像彫刻を試みた仏師があったであろうか。円空の前には、伝統的な技法もなく芸術的な野心もなく、たゞひたすらに多くの庶民達の幸せを願う一遊行僧としての一念のみであったに違いない。

今残る円空仏は、その数推定五～六千体と言われるが、その多くは安全管理の都合上神社の奥深く厳重に格納安置されているが、本来はこれらは円空の意志にあらず誰からも拝んでもらえる村のお堂にこやかに鎮座されることが望ましいが、これ又時代の致すところ、残念という外はない。

幸いにして郡上は円空彫像発祥の地、その数も美並村を中心として百四十体余あり、来郡回数推定七～八回余り、まことに円空第一のふるさとでもあり、郡上人である私共も一入感慨の深いものを感じるのである。

願わくは今度の禅昌寺展見学を機会に一層円空仏に対する関心をもたれ、人間円空に対する認識をあらたにしていたゞければ幸いと思うのである。（挿絵写真は昭和五十一年筆者発見の薬師如来像、郡内個人蔵、後藤英夫氏撮影）

⇩内ケ谷への⇩

昔のみち

有代信吾

内ケ谷は明治二二年（一八八九）に落部村に合併し、同三〇年に西川村大字内ケ谷となったが、それ以前は内ケ谷村であった。明治五年の「村明細帳」には、戸数一七戸、人口八六人であったと記されている。しかし昭和四五年の集落再編成事業で解散したので今は人家は無くなった。

昭和四三年頃林道が開け、また植林のための作業道ができて、昔の道は通る人もなくなり、現在では草木の茂るに任せて、通行できなくなった道も多い。

昔は武儀郡板取村のことを通称「西」といっていたが、この西への街道は落部の栃尾から登ると目通り三・七mもある大杉の前に出る。この道を通る人々の目標になった杉である。さらに登ると標高八八〇mの黒田峠である。峠から内ケ谷の金山に至る。この道の途中に石地蔵がある。文化一〇年（一八一三）七月建立と刻んである。金山からはイワゴ谷を登り、西峠を越えて板取村三洞に至るのである。三洞からは島口を経て洞戸村へ、洞戸村から美濃市・岐阜市に通じ、また板取村から山県郡美山町にも通じていた。

この西街道は古くから開けていたものと考えられる。落部の大坪家の文書に「妙見宮下総千葉より御勧請の節、最初内ケ谷村の内、金山という所へ御鎮座これ有り、下総より六人の頭に村人六人差し添え来り、半年程にして剣村阿千葉へ御移り（此所、元妙見という）それより久留栖牧村篠脇城の麓に御鎮座、内ケ谷金山に森これ有り、御社もこれ有り、以下略」（大和村史史料編一四ページ）と記されている。この文書は天保九年（一八三八）ころに書かれたものであり、その信憑性に疑点はあるにしても、このころすでにこの街道のあったことは間違いなかろう。東氏の入部が承久年間であるから今からおよそ七六〇年も前のことである。また、内ケ谷から三洞へは、右の道のほか、中在所から中峠を越えて行く道もあった。

〈内ケ谷林道開設記念碑〉

内ケ谷から越前の荷暮村（福井県和泉村）へ行く道は金山から平瀬へ向かい仏谷に沿って登り、標高九三八mの仏峠を越えるのである。この峠の両側に、目通り二七〇cmくらいの杉の大木が二本並んでそびえている。その北側の杉の下に高さ六五cm、幅一七cmくらいの石仏がある。中央に「南無妙法蓮華経」その左右に（奉納之願主萬蓮坊功徳往来之諸人為一切無障碍）と刻まれている。右側面には文化元甲子（一八〇四）四月廿八日と、左側面には越前大野郡弥三右衛門とある。往来の人々の安全を祈念して建てられたものであろう。それだけ昔の道は険阻であり、また危険で苦労の多いものであったであろう。冬期には雪のため通れなかったこの道も、春ともなれば越前から鎌や干魚などを売りに来る商人や歩荷などが通い初める。この辺では仏峠の道にしかない珍らしいタカサゴ草の白い花や、豊かに垂れた藤の花に眼を和ませ、夏には藤色のフジウツギの花やイチヤク草、ウメカサ草の可憐なピンク色の花の咲いている道を汗をふきながら通ったことであろう。また秋には山ぶどうや栗などを採って食べたりもしたであろう。この道を歩いていると、そうした昔の人たちの姿が目に浮かぶ。峠に立つと越前から吹き上げて来る風は夏でも肌にひんやりと冷たい。

このほか、本村内から内ケ谷へ行く道は、万場からは柿ケ洞から内ケ谷のナラ谷へ、同じく会所洞から落部の乙原を経てハカマ谷へ通じていた。また福田の長石谷から入ると、コイト坂を登った所で洞口の深谷からの道と合して大峠を越えて、内ケ谷の中在所・下在所に至る道などがある。これらの道を通って昭和三五年ころまでは万場から福田までの人たちが内ケ谷へ炭焼きに通っていた。そのころの様子を「若いころは大勢で内ケ谷へ炭焼きに行ったものだ。朝は真っ暗いうちに、ちょうちんを持って会所洞の入り口で待ち合わせて、道々、政友会とか民政党の政治の話や、色気話などに花が咲き、賑やかに行った。」（万場象田時郎氏談）また「私も内ケ谷へは、ずい分通ったが、冬はわらじの紐に雪がまぶりついて暖めないと解けないようなこともあった。帰りは炭を三俵くらいずつ背板につけて負い、皆が一列になって帰った。途中で休憩する時は荷杖で道端の石などをたたくと、それが合図で荷杖を背板に支って休んだものだった。」（名田部下広瀬鍵氏談）と両氏は語っている。

〈仏峠の石仏〉

また、村外から内ケ谷に入る道としては、越佐から内ケ谷峠を越えてショウケ谷へ、有坂の竜牙から上り尾峠・下峠を越えて下在所へ行く道や、亀尾島から下在所への道があったが、亀尾島の道のほかは、今はほとんど通れない。

南京博物院展を見学して

河合芳英

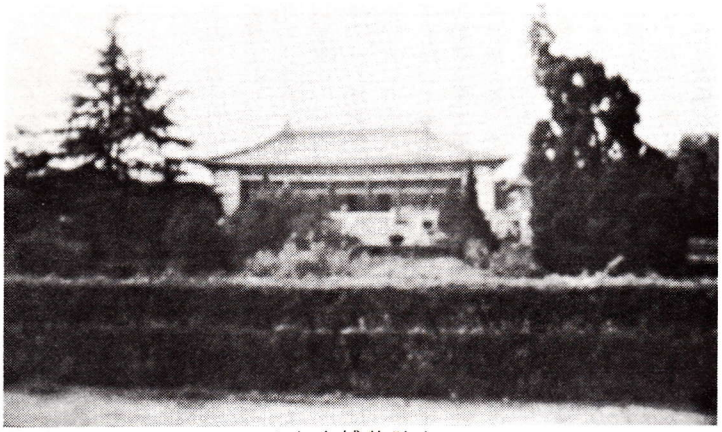
五月七日、雨のそぼ降る朝バスに乗る。和やかな談笑で車中がはずみ、外を見るとさつきの季節で道路脇や市内の緑地に色形さまざまの花を咲かせ眼を楽しませてくれました。

途中事務局の方からパンフレットを頂き、正午前名古屋博物館に到着し会場に入る。

大きなパノラマ写真、石像などに迎えられ、百二十点の展示物を参観しました。

この展覧会は、名古屋市と南京市との文化交流事業として開催されたもので、「長江（揚子江）流域五千年の美術」と副題が添えてあり、江蘇省を中心として長江下流に開いた所謂「江南文化」は中国の歴史と文化の形成に重要な役割を果たし、更に我が国の文化にも大きな影響を及ぼしています。

その文化の精髄を作品で系統的にたどり理解できる機縁を与えられた事は嬉しい限りでした。



〈南京博物院〉

最初に南京市で発掘された新石器時代の物として彩色された、かなえ・鉢・玉製の装身具等は、日本はまだ縄文時代であるのに中国の進んでいた事実を示し、又春秋呉時代の拓本に依れば牛を使って農耕を行い、漆や青銅の器を用いた。これは我が国の弥生式文化の時代に相当します。

約二千年前、青磁の香炉・陶磁器製の武士・踊る女・動物の形を巧みに配した容器などを産し、現代の作と云っても遜色がないと話し合ったことでした。

漢代の作の紅陶の豚舎・青磁の鶏籠、又唐代名も無い陶人が「油合」と書いている磁器等、約千年以前奈良時代に相当する時の庶民の生活が偲ばれほゝ笑ましく感じた。又日本へ渡来した盲目の高僧鑑真の郷土揚州から出土した「三彩双魚型壺」は遣唐使が伝えたと云われる唐三彩の逸品といわれて見事なものでした。

感嘆の連続で一巡しましたが、最後の圧巻は「岳陽楼図」です。縦三米弱、横二米五十の絹本水墨画で、作者は龔賢（きょうけん）、明・清代に彩管を振う。

この楼は洞庭湖を北に臨み、波と島を眺望し、古来文人がよく訪れ、唐代の詩人杜甫の作品は我が国にもよく知られています。

この作品は、重墨の妙を尽くして明暗の変化を示し、参観者の足を留めていました。

この南京展を鑑賞して、中国の中心地の文化の変遷を知り、先人の遺跡をたどることにより「温故知新」の感慨を覚えると共に院長書の挨拶にある「山川異域、風月同天」の如く、心を豊かにして戴きましたことを謝しつゝ、会場を離れました。

俳句

有代信吾

草いきれ女人禁制拝み岩

十六夜や横大門の帰り杉

柿渋を採るころとなり宗祇の忌

花茗荷淡々（もわわ）と咲く木地屋敷

落城の翳りうつして秋の水

黒岩きくゑ

奥長良斜めによぎり天の川

川に添ひ稔田続く美濃路かな

霧ぶすま美濃越前の国境

桑田和子

名月

名月を先づ鐘楼に拝みけり

名月に松山静かに昏れにけり

名月や事なき日々をよろこびて

下広すゑ乃

ふくよかな胸の石仏痩せわらび

石垣の十薬の根の長きかな

暁鐘に音して開く花芙蓉

露草や発掘進む居館跡

篠脇の城の由来や曼珠沙華

三島秋男

地蔵盆

町角に野花の香り地蔵盆

姉逝きぬ野辺は稔につつまれて

ゆうぞめの輝く紅さ杣の道

岐阜県博物館における特別展

「美濃の絵馬」を見学して

土松新逸

四月二四日から五月三一日まで岐阜県博物館（関市小屋名、百年公園内）において美濃の絵馬が一堂に集められて特別展が開催された。この特別展には、大絵馬では馬図、武者絵、歌仙絵、芸能・娯楽図、祈願・祭礼図、物語絵、学問・芸道図、生業・風俗図、近代戦役図、花鳥・動物図、変わった絵馬など七六点が各地から出品されていた。本村重要文化財である明建神社所蔵の絵馬（繋馬図）も出品されていた。

この絵馬は八幡城主遠藤常友が寛文八年（一六六八）九月に妙見社へ奉納したもので、狩野派の画家和田平左衛門が画いたもので立派な繋馬の絵であり、展示された馬の絵の中でも一段と光彩を放っていた。因に、この常友が同じ画家による絵馬を八幡小野八幡神社へ奉納した「松に鳩」図と、慈恩寺へ奉納した「竹に虎」図もこの特別展に出品してあった。ほかに馬の絵では、土岐の妻木八幡神社蔵の一対の白黒の馬の絵は慶長一四年（一六〇九）奉納で一番古いもののようであった。また、養老町押越八幡神社蔵の群馬図は天保一五年（一八四四）奉納のもので横二・五㍍の大きな図面一ぱいに白黒五頭の野馬の変化のある姿が近代画風のタッチで生き生きと描かれているのが眼についた。

これらのほかに、八幡町小野八幡神社蔵の三十六歌仙図は寛永八年（一六三九）のもので珍しく、また、上石津町湯葉神社蔵の算額は江戸末期のもので、これも大変珍しいものであった。

小絵馬は随分数多く出品されてあったが、美並村星宮神社の左鎌貼付のもの、八幡町楊柳寺の双股大根や「心」に錠など面白いものが沢山あった。殊に大垣市明星輪寺蔵のもので、夫婦互いに今後他の男女への色情を断つ（色情断ち祈願）というのに、女は一代としているのに男の方は「但し五ケ年間」としているところなど、人情の機微にふれていておもしろいと思った。八幡町楊柳寺へ奉納したもので、大きく「松」の字を書きその下に「戌年の女四人」などと小さく書き連ね、男（客）を待つ意を表しているものなども人情が感じられた。

以上絵馬展を見学して感じたことは、人生の不安や悩みなどを神仏の加護を求めて敬虔な気持ちで奉納した人々の信仰の世界の一端を表しているこれらの絵馬が、美濃地方に多いと聞き、この地方の素朴な民情が、これらの数多い絵馬にあらわれており、民俗資料として貴重な文化財であることをお互いに認識したいものである。

〈明建神社の絵馬〉

短歌

木島　泉

酔ひてゐしおのれみつめて月明に透きとほりゆく歩巾なりけり
分かちきし秋草なりき寂しめば　饒舌となる黒き酒壺
昼すぎの穂ぐさにいまだ露ありぬ住まずなりたる家のめぐりに
わけて濃きもみじなりけり逝く秋のひかり一樹の溜息として
虫の音を閨にめぐらせ命あるもののかなしみ沁みとほりゆく

矢野原幸子

わが前に髪すけと背をむけてたつ少女やさしき匂ひ持ち始む
梳きあぐる少女の髪へ風すぐるとき一斉に蝶翔たしむる
梳る髪あるときはかたくなに吾を拒否するごとく逆立つ
秘めごとのごと身を寄せて桜貝みせくれる少女あわれ稚なし
夕映えに芒穂絮の舞ひあがる終のはなやぎついの寂しさ

会員消息

◎新会員紹介

〔住所〕〔氏　名〕〔電話番号〕

剣　河合　芳英　一二三〇四
大間見　松井　博　三五〇五
徳永　木島　三郎　三五九〇
〃　渡辺　明夫　二六九五
牧　粟飯原高照　二三六二
〃　土松　貞二　三九八〇
〃　日置　昇　三六三六
〃　本田　欽一　三一六〇
福田　旧田　順慶　三四四五

右の内、松井博氏は隆氏と、粟飯原高照氏は常城氏と名義が変わりました。

◎本年度になって、左の会員が逝去されました。謹んで哀悼申し上げます。

粟飯原常城氏
五六年五月二三日
大場　賢一氏
五六年六月二一日

見学会のお知らせ

◎奈良における文化財見学

日時　五六年一一月三日　午前六時発
〃　四日　午后九時着

見学　第一日
大安寺、唐招提寺、薬師寺
第二日
法隆寺展（於奈良博物館）
西大寺、秋篠寺

会費　一四、〇〇〇円

右の通り実施することとなりました。詳細は別途ご連絡いたしますが、万障繰合せてご参加下さい。

次号原稿募集

一、見学記　八〇〇字程度
二、見学又は文化財を主材とした短歌　三〜五首
俳句　三〜五句
三、原稿〆切　五七年二月末日
四、発刊予定　〃　三月末日
五、宛先　大和村文化財保護協会事務局（教育委員会内）

土松新逸

縄文遺跡

遠々き祖たちがここに住みたりし
跡かも夕陽にひかる土器片
一つ一つの土器片に遠き世を生き
しひとらの心こもれる如し
鉄もなく黄金もなき世に生きて石
を磨ける遠き祖たち

妙見大門

ひがん花真赤に燃ゆるこの丘に立
てば迫り来遠き幻影
いじめたりいじめられたり大杉の
下に遊びしいくつかの顔
はらからの顔重なりて笑みかくる
大杉の下風あたたかし

土松貞二

明建神社七日祭奉讃

八月の神の杉鉾天を突く
御座涼し神主祓ひをうけ給う
蟬時雨神饌の楽止むるとき
頭上ぐ獅子にわらべらどっと散る
わくら葉も戴せて御輿の静かゆく

文化財の愛護者にご参加下さい

○文化財は、祖先が残してくれた尊い大切な公共の財産です。わたくしたちの身近かなところにある数々の文化財を、みんなの力で護ってゆきましょう。

○大和村文化財保護協会が発足してから五年になり、会員も一三〇名余りになりました。この際より多くの方々に入会していただいて、本会の発展を期してゆきたいと思います。

○会員の特典として

●岐阜県文化財保護協会発行の「濃飛の文化財」（年二回）および特集「文化財美濃と飛騨」をお届けします。

●本会の会報「文化財やまと」（年二回）をお届けします。

●県本部主催の見学会・講演会研究会に参加できます。

●本会主催の文化財の見学その他の研究会。講演会・文化財めぐり等に参加できます。

○会員となるには、年額二〇〇〇円をそえて、事務局（大和村教育委員会内）または、地区の理事へ申し込んで下さい。

≡編集後記≡

▽コスモスの花が咲きみだれ、美濃路の秋はまさにたけなわという今日このごろです。会報第六号をお届けします。今回もまた研究・随想・見学記・短歌・俳句など多くの玉稿をいただき、充実した本号の内容は、会員の皆様にきっとご満足をいただけるものと思います。

▽誌上いたるところに、先人の遺してくれたものへの理解と愛情がみなぎっているようです。文化財は有形無形を問わずその中に先人の心が生きていて私達に語りかけているのでしょう。たといその遺跡や遺物が当時の富豪や権力者のものであろうとも、それを支えたものは名もなき庶民の力であり、願いであったにちがいない。

▽文化財保護協会の名に示されているごとく、今後はさらに保護への実動にも移るようにという意見が先回の理事会でありました。このことについても会員の皆様のご意見をお寄せ下さい。

▽農繁の時節、皆様のご健勝を念じて後記とします。（畑中記）

「文化財やまと」第六号　昭和五六年九月三〇日発行　発行者／大和村文化財保護協会　代表者　野田直治　印刷者／石田百子